

【5学年のまとめ】

1. 学年の取組

年間計画を確認し、学年の児童に道徳的価値をより探究させたい価値であり、より議論しやすいものを考え、研究授業としては「クマのあたりまえ」の教材を選んだ。研究授業以外でも、プランニングシートを活用し、教材研究を行った。

校内研究の目標実現のため、研究授業では主に以下のような取組を行った。

①議論する時間確保のための工夫

価値について深く考えるために、話し合いの時間を15分確保した。そのために、前段の発問も最低限となるよう吟味して時間短縮を図りつつ、道徳的価値への方向付けを図った。

②物事を多面的・多角的に考える発問の吟味

多面的・多角的な視点で考えられるような発問の精選を行った。児童が様々な側面から生命のかけがえのなさを自覚でき、多様な考え方や感じ方に触れられるような中心発問を準備した。また、児童の思考を広げ深められるよう補助発問や切り返しの発問も準備した。

③学年2クラスで先行授業

先行授業の結果、以下のことが確認された。

(ア) 前段の発問を短縮し、後段の議論に時間を割けること。

(イ) そもそも石が生きているのかという問いが児童から起こること。

(ウ) 終末の説話（以前児童が授業を受けた講師の言葉）が効果的であること。



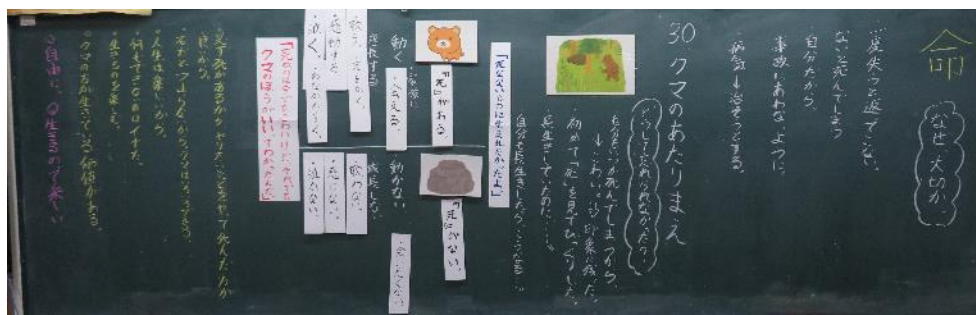
2. 授業実践について

主題 生きているからこそ 内容項目【D-19 生命の尊さ】

本時のねらい 「死」のあるクマと「死」のない石を比較し、「クマの方が良い」と結論を出した子グマの思考を話し合う活動を通して、生命の誕生から死に至るまでの過程の尊さについて気づき、生命のかけがえのなさを自覚し、生命を尊重する心情を育てる。

教材名 クマのあたりまえ（出典「新しい道徳5」東京書籍）

授業者 5年3組 小谷野 裕太



【授業の流れ】

- ①学習問題を設定する。（命ってなぜ大切なんだろう？）
- ②教材の読み聞かせを聞く。
- ③死んだおすグマを見た子グマの気持ちを考える。
- ④クマと石の違いを考える。
- ⑤クマのほうが良いと結論づけた理由を考える。
- ⑥自分を振り返る。
- ⑦教師の説話を聞く。

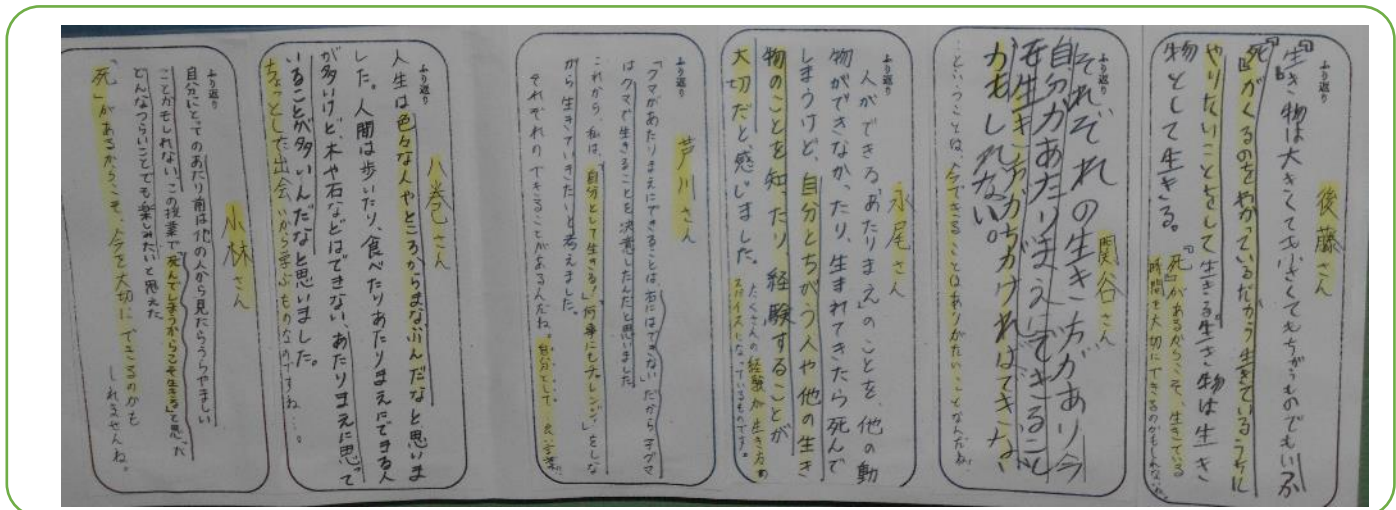


授業者反省（一部抜粋）

- ・板書が計画的にできなかった。
- ・導入で蛇足があった。
- ・自分事としての話にもっていけないかった。
 - 1・2組は、クマが自分にすり代わって話をしていた。
 - 本音を引き出せなかったのではないかと思う。
- ・切り返しについて
 - つらいことや悲しいことがあるんだという児童の発言をもっと深められた。



児童の振り返りより



3. 成果と課題

- 自分の考えをひろって書き溜め、議論タイムに結び付いていた。
- 聞くとき、書くとき、議論するときのメリハリがしっかりついていた。
- 終末の説話が疑問で投げかけている「自分がいるのは当たり前？当たり前じゃない？」という終わりなので、授業後も余韻が残った。
 - 全員が天井を向く授業を目指すことが大切。今回は、終末の教師の説話のときに天井を向いた。

▼教師の意図があるのではないか。

- 切り返したときの個人の考えを受け入れる必要がある。
- 道徳は、考えは1つではない。

▼高学年は、誰かの考えに絡めながら自分の考えを言えるようにしたい。

- 目指す議論する姿になれるように、指導を積み重ねていくことが大切。

▼児童だけで議論が成立するように、話型を低学年から示していったらよいのではいか。

- 各学年最初のオリエンテーションで、自分の考えとその考えになった理由を言えるよう指導することも。

▼小グループでの話し合いでは、何をすればいいのか。

- 自分の考えを言うことは大切。
- 友達のことをメモはしているが、それをしっかり自分の考えと照らし合わせているのか。
- 考え方は1つでないことを知る。

▼板書の最後が難しい。

- 最後は、どうやってまとめたらいいか。

